ISSN　1883−4213

奈良県立図書情報館報

うんてい

（うんてい復刊）　第４号
平成 24（2012）年３月１日

初めて活字になった時

千田　稔

だいたい私は思慮深い人間ではない。恩師が編者である歴史地理学の専門書に、原稿を書けと言われて、私は素直に引き受けた。大学院修士課程の一回生の頃である。恩師には深い考えもなかったのだが、私は、それまで学会誌に一編の論文も発表していなかった。だいたい、学会誌に論文を発表するのは、大学院の博士課程頃からである。それが、研究者になる以外にどうしょうもないと思う時でもある。さびしい慣例である。

このような慣例からいえば、私が修士課程一回生の時に、「拙稿」を学術書に載せたのは、世間から見れば、まさにフライングである。その本が出版されたときも、初めて活字になった自分の文章をみながら、悦にいっていた。何もわかっていなかったのだ。

ところが、ほどなく私にむけられた非難のまなざしに気付く。だいたいにおいて気付くのが遅すぎたのだ。私にとっての処女論文を商業出版物に載せたのである。「拙稿」以外に、その本には、学界で活躍し始めた先輩や学界で重きをなしている先生方の論考ばかりである。当然、私のやったことは、「暴挙」である。私の耳にも、あてつけがましい批判的な声が聞こえたが、私がいないところでは、「けしからん」の大合唱であったにちがいない。「拙稿」の内容は、卒業論文の序論的な部分である。ますます「けしからん」のだ。卒業論文なんていうのは、赤ん坊のつたい歩きのようなものだ。それをよくぞ学術書に差し出した奴の気が知れんと、チクチクといじめられた。私の「拙稿」を載せてくれた恩師の考えは、どうだったか、たずねるのもはばかった。「どっていうことはない」と答えてくれたかもしれない。

私は、みずから犯した「暴挙」に対していじめられて、研究者のたまごとしてスタートしたが、長い年月を経ると、全く無意識ではあったが、慣例というハードルをこえた「快挙」ではなかったかと、憎まれ口をたたいてみたくなる。まだ懲りていないらしい。

Contents

・巻頭言　**初めて活字になった時** ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
・資料紹介「**大和国多武峯　関西日光全図**」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
・**芸亭院開創1250年顕彰** ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
◆石上宅嗣と芸亭院・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
◆石上宅嗣卿芸亭院顕彰の歩み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
・地域資料から「**歴史資料としての新聞**～郷軍奈良支部機関紙『大和錦』」 ・・・・・ 6
・「**特定コレクション**」**Web情報発信について** ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
・「**未整理**」**の公文書の閲覧請求について**・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
・奈良のもの・ひと④　**太安萬侶 ～古事記編纂1300年～** ・・・・・・・・・・・・・・・ 8
・**レファレンス事例紹介** ＜第４回＞ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
・**イベント掲示板**・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

奈良県立図書情報館
Nara Prefectural Library & Information Center

写真解説

『大和国多武峯　関西日光全図』

明治29（1896）年に葛城俊治が作成・出版した多武峰（桜井市）の全景図。多武峰は、関西の日光ともいわれ、秋の紅葉、春は桜の名所として毎年多くの観光客が訪れる。また、古代から三輪や飛鳥と吉野を結ぶ交通の要所でもあった。

多武峰は、藤原鎌足の死後、摂津国阿威（あい）山にあった墓を、鎌足の長男で僧の定慧（じょうえ）がこの地に移し、天武７（678）年に十三重塔を建立したのが始まりと伝えられている。以降、天武９（680）年に講堂（現・神廟拝所）を創建して多武峰妙楽寺と号し、藤原氏の始祖を祀る地として繁栄した。その後、十世紀ごろからは天台宗に属したことにより、法相宗の興福寺と宗派の違いによる争いや、豊臣秀長による郡山城下への遷座と帰山などを経て、明治の初め神仏分離令により、明治２（1869）年に談山神社となっている。談山の社号は、古く鎌足がこの地で中大兄皇子（のちの天智天皇）と談らい、蘇我氏を滅ぼしたとの伝承による談山（かたらいやま）に由来するといわれている。

本図は『大和名所図会』（寛政３（1791）年）にならい、中心に談山神社の境内を置き、左上に鎌足の墓所がある御破裂山を描いている。図中には二ノ鳥居付近に「別格官幣談山神社」と書かれた標柱があったり、山高帽にステッキを持った洋装の人物などに明治期の時代を感じさせる。

ちなみに、発行者の葛城俊治という人物だが、当館所蔵の奈良県庁文書の『明治二十九、三十年社寺之部社寺雑件』には「多武峰村字多武峰葛城俊治主典志願ノ件」という文書が収録されており、葛城は、明治29（1896）年頃は談山神社の主典を勤めていたことが明記されている。当時、神職の傍ら談山神社の広報・宣伝のため出版事業にも関わっていたのであろうか。　（鈴木　陽生）

【参考資料】

- 『桜井市史　上巻』桜井市史編纂委員会　1979年
- 『談山神社：大化改新1350年』新人物往来社　1995年
- 『藤原鎌足、時空をかける：変身と再生の日本史』黒田智　吉川弘文館　2011年

芸亭院開創1250年顕彰

◆石上宅嗣と芸亭院

奈良県図書館協会では、その会則に早くから芸亭院の顕彰を謳い、芸亭院があったとされる地（奈良市立一条高校東）には、奈良県図書館協会により「芸亭伝承地」顕彰柱が建立されている。

それは、石上宅嗣が設立した日本最初の公開図書館芸亭院の精神を受けつぎ、時代に即した図書館運営をするに当たっての精神的拠り所としているからである。この芸亭院は宅嗣が天平宝字5（761）年10月遣唐副使に任ぜられた時に草創されたという伝承から、昭和37（1962）年11月に「宅嗣卿慰霊祭並“芸亭院”出版記念会」を挙行している。本年は1250年目の節目に当たり、もう一度宅嗣の遺徳を偲ぶために、宅嗣はどんな人物なのか、芸亭院とはどんなところなのかを紹介したい。

石上氏はもと物部氏で、宅嗣の祖父である麻呂が天武朝に石上朝臣に改賜姓された。その麻呂が左大臣、父弟麻呂は中納言に昇進している。『続日本紀』によれば、宅嗣は桓武天皇の即位間もない天応元（781）年6月24日に五十三歳をもって薨じているので、天平元（729）年の生まれである。したがって大仏開眼は二十四歳の時で、天平仏教華やかな時期はその青年期から壮年期にかけての時である。卒伝によると、その性格は明朗で覚りがよく、姿や様子が立派であった。儒教の経典や歴史書を愛し尊び、広く書物に通じていた。文章を作ることを好み、草書や隷書に巧みで、律令官僚としての経歴を積み、宝亀11（780）年に大納言になっている。また、宅嗣は言葉や振る舞いがおだやかでみやびであり、そのことで、当時有名で、よい風景や山水にあうたびに、時に筆をとってこれを主題に詩文を作ったという。奈良時代後半には宅嗣と淡海三船が文人の筆頭とされ、二十数年間文化人のトップに立ち、時代の主導的立場を保持していた。

石上宅嗣の最も有名な事績である芸亭院については、『続日本紀』によると、旧宅を喜捨して阿閦寺とし、寺内の一隅に儒学の書を中心とした院を置き、芸亭と名づけた。そして、学問好きの人が閲覧したいときには自由にそれを許可するようにした。『延暦僧録』には芸亭院は「寺の東南に造る」とあり、阿閦寺の寺内、東南の一隅にあったという。その一郭には「山を堅め沼を堀り、竹を植え花を栽える」とあり、寺内芸亭院の一郭が立派な園池であったことがわかる。また、芸亭の東北には維摩居士（釈迦の弟子）の居室になぞらえて造られた方丈の室があって、宅嗣はひたすら三宝を持念し、院内には禅門を構え、講演場をもち、単なる書籍閲覧所というばかりでなく広い意味の文化施設であった。

『続日本紀』の石上宅嗣の薨伝の条

「延暦僧録」の編者として宅嗣の伝を立てた思託は、鑑真和上と一緒に日本に来た唐僧で、宅嗣とは知遇の間柄となる。その思託が宅嗣を芸亭居士と呼び、唐の高僧との著作の贈答の話におよび、宅嗣の高名を披露して結んでいる。

池田源太氏は、「石上宅嗣の芸亭とその時代」の講演のなかで、宅嗣の境地を一言にしていえば、宅嗣の漢詩「小山賦」の最後に「燕処シテ、超然タリ、唯道ニ是レ則ル」と言っているのにつきるという。「燕処」は安らいで住むことをいい、世間のことには深く患わされず、この小山のある邸宅に住んで、超然としているが、しかし、人間界や自然界に通じている「道」にはそむかない態度であると言うのである。これはやはり平城人士が、身につけていた老荘的センスを受け容れていたからであると考えられる。つまり、宅嗣においては、仏教といわず、儒教、ないし、老荘的思考形態も合わせてもっていた。また宅嗣自身は梵行という法号をもち、維摩を目指して阿閦寺に住む在家の仏教信者としての生活を考えていた可能性が強いという。

平安朝になって文章博士や東宮学士になった文人の賀陽豊年（かやのとよとし）の卒伝には、宅嗣が若い豊年に親切に厚く対応し、芸亭に招いて５年間諸書を閲読して研究する便宜をはかったことを記している。これをみると、芸亭院はやはり学校と言うよりは蔵書を自由に閲覧させる図書館であり、また研究所のようなものであったことがわかる。

宅嗣は芸亭を利用する者に対して俗世間の心労を超越して悟りの境地にいたるように願うと述べている。豊かな教養をもち、求道的生活を送る宅嗣は、書物を愛する同好の士に、自分が書物で得た喜びを多くの人に知ってもらいたいと考えていたのであろう。

【参考文献】
- 林陸朗『奈良朝人物列伝　「続日本紀」薨卒伝の検討』思文閣出版　2010年
- 池田源太『石上宅嗣所建の芸亭とその時代』奈良市企画部企画課　1976年
- 桑原蓼軒『日本最初の公開図書館　芸亭院』芸亭院創始千二百年記念会　1962年
- 新村出「芸亭院と賀陽豊年」（『典籍叢談』岡書院　1925年）
  同「石上宅嗣の芸亭につきて」（同所収）
- 思託「延暦僧録」『日本高僧伝要文抄』（新訂増補国史大系　第31巻）吉川弘文館　1965年

（大宮　守友）

◆石上宅嗣（いそのかみやかつぐ）卿芸亭院顕彰の歩み

芸亭院は、奈良時代後期の官人であり文人としても誉れの高かった石上宅嗣が宅内に建てた阿閦（あしゅく）寺の一隅に設けたわが国最初の公開図書館である。そこには宅嗣の儒仏一体思想に基づいて「外典」（儒教書）等が置かれ、好学の徒に自由に閲覧させたという。

平成24（2012）年は、この芸亭院が開創されて1250年という節目の年にあたる。5月には奈良県図書館協会を中心に、日本図書館協会、近畿公共図書館協議会等の主催による顕彰研究集会が予定されている。そこで本稿では、平井良朋氏の先行研究や関連資料によって、顕彰の経緯を辿りたい。

石上宅嗣ならびに芸亭院の業績への顕彰を最初に図書館界に呼びかけたのは、大正7（1918）年6月、新潟市で開かれた第13回日本図書館協会年次大会での、山形県立図書館顧問・山形市立商業学校長渡辺徳太郎による「芸亭と石上宅嗣」と題した講演であった。渡辺は、この中で、宅嗣や芸亭院について概要を紹介し、「今日…、石上宅嗣・芸亭の名さえ殆ど知られざる状態となりたりとは、豈昭代の恨事にはあらざるか」と述べている（『図書館雑誌』№36）。そして、同年11月には奈良を訪れ、正倉院や宅嗣ゆかりの石上神宮を訪ねた後、阿閦寺を調査していた奈良女子高等師範学校教授水木要太郎らと、法華寺の東にあたる阿閦寺伝承地付近の現地踏査をしている（「芸亭遺蹟実地取調顛末」『図書館雑誌』№38）。

石上朝臣宅嗣卿顕彰碑
天理図書館前庭

これを機に、顕彰や保存活動も動き始め、大正9（1920）年4月には、日本図書館協会主催で、薨去千百四十年記念式典が東京の南葵文庫大礼記念館で開催された。式典には、図書館関係者67名が参加し、渡辺徳太郎が「石上宅嗣卿及芸亭遺跡に就きて」と題した研究発表も行っている。

新村出は、後に芸亭院顕彰にも深く関わることになるが、京都帝国大学附属図書館長であった大正9年、平安初期の賀陽豊年と芸亭院や石上宅嗣との関わりを論じた論稿を発表している（「芸亭院と賀陽豊年」『芸文』9月）。この年には、水木要太郎も所在地を擬定した「石上宅嗣宅址」を発表（『奈良県史蹟勝地調査会報告第7回』11月）しており研究も徐々に見られるようになった。

大正11（1922）年5月、第13回近畿図書館協議会が神戸市で開催された。その際県立奈良図書館から宅嗣卿顕彰の記念碑建設の申し出があったが、新村館長からは生誕1200年を期して近畿で表彰し、遺跡については異説もあり県立奈良図書館前に建設したいという賛成意見が出されたいう。

顕彰の動きはその後、日本図書館協会や奈良県図書館協会を中心に進められ、大正14（1925）年4月、東京の南葵文庫で開催された第19回全国図書館大会で、奈良県図書館協会長・県立奈良図書館長堀内竹蔵は大正18（1929）年が宅嗣卿生誕1200年に当たることから、記念祭執行方法、資金の募集方法、

開催場所及び期日等を協議してほしいとの「石上宅嗣千二百年記念に関する件」提案した。一方渡辺徳太郎は、大正19年が薨去1150年に当たるとして記念祭の開催を提案している。その後日本図書館協会幹部と提案者が協議し、薨去1150年祭を県立奈良図書館が主となって開き、日本図書館協会が協力することとなった。

このような中、昭和3（1928）年6月の県立奈良図書館成人講座では、新村出が「天平時代の公共図書館石上宅嗣の芸亭について」講演し啓発活動も行われていた。そして同年7月、県立奈良図書館、天理図書館、東大寺図書館、奈良女子高等師範学校附属図書館の関係者が集まり、宅嗣卿顕彰会組織の打合せをし、9月には、日本図書館協会、奈良県図書館協会、近畿図書館協議会等が発起人となって「石上宅嗣卿顕彰会」を組織し、規程を定め、趣旨書を以て全国の図書館、学校、図書館関係者、有志等に賛同と拠金を求めることになった。

こうした中、昭和4（1929）年8月、天理教中山正善真柱から多額の醵出金の申し出があり、新聞社、図書館、学校等、130件余にものぼる一般会員の醵出金と合わせて翌年秋に開催されることになった。

昭和5（1930）年10月18日、天理外国語学校の東辺に天理図書館が開設され、前庭に石上宅嗣卿顕彰会により石上朝臣宅嗣卿顕彰碑が建立された。午前に天理図書館開館式があり、午後1時から前庭で、顕彰会による「石上宅嗣卿千百五十年祭並建碑除幕式」が挙行された。

顕彰碑は、石上宅嗣の故地、石上神宮に近いとのこと等から、同地に建立されることになった。碑文を撰文したのは、前述の新村出、書は寧楽書道会長辻本史邑（勝巳）が揮毫した。同時に、伝記、文藻、宅嗣関係の資料や顕彰事業経過報告等を収録した『千百五十年記念石上宅嗣卿』（仲川明が編集に当たった）が刊行配付された。

その後、戦中戦後を通じて大規模な顕彰事業は途絶えていたが、昭和37（1962）年が芸亭院開創1200年の節目の年にあたることから、11月、芸亭院の所在地等を地形的に研究してきた桑原蓼軒の『日本最初の公開図書館　芸亭院』出版記念と表彰も併せた「宅嗣卿慰霊祭並“芸亭院”出版記念会」が天理図書館で開催された。慰霊祭典、奈良学芸大学池田源太教授の講演「物部氏の故地について」があり、関係者200名の参加となった。

その後昭和46（1971）年10月には、宅嗣卿と芸亭院顕彰事業を継承する奈良県図書館協会が、伝承地に近い奈良市立一条高校東側の国道添いに、宅嗣の業績を賛えるとともに、芸亭院の存在が広く世に認識され、その趣旨が今に生かされるよう「日本最初の公開図書館　芸亭(うんてい)伝承地」と掲げた顕彰柱を設置した。

昭和56（1981）年は宅嗣卿薨去1200年に当たることから、前年秋から奈良県図書館協会長らを中心に記念式典の準備が進められた。県立奈良図書館でも『芸亭院：図書館の発祥』を発行し広報活動にも乗り出している。そして、昭和56年10月9日、奈良県図書館協会、近畿公共図書館協議会、日本図書館協会主催、天理大学の全面的な協力を得て、同大学附属図書館を会場に「石上宅嗣卿薨去1200年　芸亭院顕彰記念式典」が開催された。

雨の中午前10時30分から顕彰碑前で祭典を行い、図書館講堂での記念式の後、奈良教育大学池田源太名誉教授の「石上宅嗣所建の芸亭とその時代」と題した記念講演が行われた。午後は、図書館横庭で記念レセプションが開かれ、終了後希望者にはバスによる史跡見学も行われている。全国から図書館関係者はじめ150名の参加があった。

平成22（2010）年9月、奈良県で90年振りに全国図書館大会奈良大会を開催した。大会テーマは平城遷都1300年と芸亭院も意識して「温故創新」。分科会や展示等でも、芸亭院、公開図書館発祥の地をアピールした。

【参考文献】※本文中掲載以外
●石上宅嗣卿顕彰会編『千百五十年記念石上宅嗣卿』
石上宅嗣卿顕彰会　1930年（渡辺徳太郎、新村出論考も収録）
●平井良朋「石上宅嗣卿芸亭院顕彰事業のこと」
（『ビブリア』78　1981年）
●「石上宅嗣卿薨去1200年　芸亭院顕彰記念式典」（開催案内）
石上宅嗣卿芸亭院顕彰会趣意書　1981年
●奈良県図書館協会「石上宅嗣卿薨去1200年　芸亭院顕彰記念式典を終えて」/池田源太「講演石上宅嗣所建の芸亭とその時代」
（『図書館雑誌』75－12　1981年）

（森川　博之）

地域資料から　「歴史資料としての新聞～郷軍奈良支部機関紙『大和錦』」

歴史資料として以外に残りにくいものとして新聞があります。知事引継書によれば、大正末頃の奈良県に保証金を納めている新聞が52紙ありましたが、ほとんどはどこの機関にも所蔵がなく、紙名しかわからない「幻の新聞」です。アメリカのメリーランド大学プランゲ文庫には、昭和20年代前半、占領軍が検閲のために集めた日本の新聞や雑誌が大量に残されています。これはマイクロ化して販売されており、当館では奈良県内発行のものを網羅的に購入しています。この目録を見ると、中央紙の奈良版から学校報や職場便りのようなものにいたるまで、県内発行の新聞95紙が見られます。しかし、これらのうちで、当館で原紙または代替資料を所蔵していたものはごくわずかにすぎません。

もちろん、言論の自由という立場からは検閲などあっていいはずはありませんが、「日本を民主化する」建前で統治に臨んだ占領軍が検閲を行っていたのは皮肉な歴史的事実ですし、その副産物として貴重な歴史資料が残ったのも事実です。歴史を調べる立場から言えば、占領軍さまさまというべきでしょうか。戦前には日本の内務省も検閲を行っていましたが、残念ながら検閲対象を資料として残してはくれませんでした。

「幻の新聞」群は、紙名が分かっただけで良しとせねばならないのでしょうか。一縷の望みがあります。個人的に保存してあったものが発見されることがあるからです。昨年の戦争体験文庫の展示で取り上げた奈良県地方課発行の『大和の隣組』や帝国在郷軍人会奈良県支部機関紙『大和錦』も、戦争体験記の収集活動の中から偶然見つかったものです。

このうち、昭和18～20年のものが見つかっている『大和の隣組』は、国の政策の周知徹底といった記事が多く、地域の動向を示すものはあまり多くありません。しかし、昭和7～10年のものが見つかっている『大和錦』には、「分会だより」として、主に町村単位に組織された在郷軍人会の分会の活動報告を継続して掲載しています。

これを見ると、招魂祭や忠魂碑を建設といった戦死者慰霊、各種兵事行事の補助などが分会の事業の中心だったようです。武術大会や軍人を招いての時局、軍事講演会なども盛んで、分会旗を新調して入魂式といった記事も多くみられます。昭和6（1931）年9月には満州事変が始まっており、一周年にあたる昭和7（1932）年9月には、県下約50の分会で記念行事や事変の意義を強調するビラの配布やポスターの掲示を行っているのが、265号（同年11月5日発行）の特集記事から確認できます。昭和9（1934）年4月に奈良の歩兵第38聯隊が満州に派遣されると、遺家族の農事手伝いや慰安といった活動も目立つようになります。

在郷軍人とは、徴兵で軍隊生活を終わった後、農業等一般社会での生活を送りつつも予備役や後備役の形で兵籍を持った兵士予備軍です。この時期、地域で軍国熱を鼓吹する活動に従事していた青年たちの多くは、やがて中国との戦争が本格化するなかで召集され戦地で銃をとることになります。

この『大和錦』は、戦争体験文庫雑誌コーナーに複製があるほか、HP戦争体験文庫企画展示から入って全紙面を閲覧することもできます。

（佐藤　明俊）

「特定コレクション」Web情報発信について

図書情報館では、著名な研究者からご寄贈いただいた蔵書の目録情報をオフィシャルサイト上で紹介する、「特定コレクション」ウェブ発信事業を開始しました。

その第１回目として構築したのは、戦間期ドイツを中心としたヨーロッパ政治史の第一人者で奈良県在住の山口定（やまぐちやすし）氏からご寄贈いただいた、政治学を中心としたコレクションです。

山口定氏は、東京大学法学部で丸山眞男氏に師事し、立命館大学法学研究科修士課程修了後、立命館大学法学部教授、大阪市立大学法学部教授、立命館大学政策科学部教授として、ナチズム、比較ファシズム、ネオ・コーポラティズム、政治体制、政策、市民社会論、公共性論等の研究を進められ、『現代ファシズム論の諸潮流』（有斐閣）や『ヒトラーの抬頭』（朝日新聞社）、『市民社会論』（有斐閣）など、多くの著作を発表されました。

さらに、立命館大学人文科学研究所所長や日本政治学会理事長等を歴任され、現在は大阪市立大学および立命館大学の名誉教授となられています。

当館では、氏の著作や翻訳書を含む数千冊の資料を整理・目録化してウェブ上に発信することで、この取り組みを広く世界にアピールし、図書情報館という場を越えて、より多くの人々と関わりを持ちたいと願っています。

また、当館の利用者にも構築したコレクションを知っていただくため、ウェブ発信の開始に合わせ、著書や翻訳書、主要論文のほか、政治学、政治思想、政治史などに関する内外の作品を展示し、氏の学問世界を紹介しました。

今後も、図書情報館の魅力のひとつとして、さらにコレクションを充実させ、来館利用者に提供するとともに、当該研究分野の専門家・研究者等を支援していきたいと考えています。

（中西　玄）

「未整理」の公文書の閲覧請求について

よく電話などで、当館が所蔵する公文書や貴重書を閲覧する際、事前の申込みが必要かとの問い合わせがあります。当館でこれらをご覧になった方ならご存知の通り、博物館などと異なり、図書館の閲覧システムの延長線上に歴史資料を提供していますので、原則的に事前申込みの必要はありません。犯罪歴や門地に関わる文書の人名や、80年を経過しない戸籍など非公開情報が文書に含まれている場合（ネット上から検索できる目録の請求記号末尾にcがついています）、若干対応に手間取ることがありますが、即日提供しています。

しかし、この原則から外れるものが、「未整理」の移管公文書です。これは、平成13年3月に改正された奈良県行政文書管理規則に従い、当館に移管、歴史資料として選別され保存している公文書のうち、受け入れ処理や目録の作成は済んでいるものの、非公開情報の特定ができていないものです。

こうしたものについては、まだ目録をWeb公開していませんが、三階のカウンターに申し出ていただければ冊子体の目録（一覧）をご覧いただけます。閲覧請求をしていただければ、15日以内に非公開情報の有無、箇所を特定したうえでマスキングなどを行い、ご覧いただくことになります。まだ、制度自体が周知されていないためか、未整理文書の閲覧請求はごくわずかにとどまっていますが、積極的なご利用をお待ちしております。

また、閲覧請求の有無にかかわらず、即日提供ができる資料が増えるよう、非公開情報を特定する公開審査の作業は逐次進めています。それが終了した段階で、目録をWeb公開するシステムもようやく整いました。Webから入る場合、一覧化されたリスト形式の目録ではなく所蔵検索画面から入っての検索という形にはなりますが、カウンター内に備えてある冊子目録より新しい情報が反映されていますので、こちらも積極的にご活用ください。

（佐藤　明俊）

奈良のもの・ひと④　太安萬侶（おおのやすまろ）～古事記編纂 1300 年～

●古事記が編纂された経緯

古事記は「ふることぶみ」とよむ説もありますが、一般には「こじき」が慣用されています。わが国で現存する最も古い歴史書であり、『日本書紀』はこれに次いで古く、両書は「記紀」と並び称される古典です。内容は、神話、伝説、歌謡、系譜などで、3巻の構成になっています。上巻は神代の物語、中巻は第一代神武天皇から応神天皇まで、下巻は仁徳天皇から推古天皇までのことが記されています。

上巻のはじめには漢文の序が記されており、古事記成立の経緯について唯一知ることができる資料とされています。それによりますと、天武天皇は当時の諸家が持っている『帝紀』（帝王日継とも。天皇の系譜の記録）と『旧辞』（本辞とも。日本古代の口承された神話・伝説を記録したもの）に、さまざまな異伝が生じたことを憂い正しい説を後世に伝えようと考えたことから、聡明かつ記憶力の優れた舎人であった稗田阿礼に誦習させて調整作業に着手しましたが、完成しないうちに天武天皇がなくなったため中断してしまいました。その後、元明天皇の代になってその遺業が継承され、和銅４（711）年９月に太朝臣安萬侶に命じ、阿礼が誦み伝えた『旧辞』を筆録して和銅５（712）年正月に献上したということです。平成24（2012）年からちょうど1300年前のことです。

●太安萬侶の墓誌

かつて古事記の序については、安萬侶ではなく後人の偽作であるという説がありましたが、諸研究が進んだこと、そして発見された墓誌と序の署名が一致したことで、古事記編纂の立証とまではなりませんが偽作説の疑いはほぼなくなりました。

墓誌は、昭和54（1979）年1月20日に、奈良市東部にあたる此瀬町で、木炭槨内から火葬骨などとともに偶然発見されました。墓は丘陵上の南斜面にあり、一辺約２メートルの正方形の墓坑の中央に木櫃を置き、そのまわりを木炭で被覆していました。墓誌は短冊型の銅板で、長さ約29センチ、幅約６センチ、厚さ0.1センチ。銘文は２行に41文字を刻んでおり、「左京四条四坊従四位下勲五等太朝臣安萬侶以癸亥／年七月六日卒之　養老七年十二月十五日乙巳」と記されていました。なお、この周辺には光仁天皇陵をはじめとして、奈良時代に中心をおくと思われる墳墓が多くみられます。

太安萬侶墓誌
（写真：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）

●太安萬侶の人物像

壬申の乱に天武天皇方で功績があった、多品治（「太」と「多」は通じる）の子という伝えがあります。『続日本紀』によると霊亀元（715）年に従四位下に叙せられ、翌年氏長となり、没したときには民部卿でした。古事記序文の格調高い漢文からは、当代一流の学者であったことがうかがえ、のち平安朝以降に宮廷神事の雅楽をつかさどることとなった太（多）氏の家の教養も役立ったのではないかと推察されています。

●墓誌発見による新たな謎

墓誌発見は、日本中をおおいにわかせたニュースとなりました。しかし、その発見により新たな疑問も生じてきました。例えば、古事記編纂は天皇の勅命による事業であったにもかかわらずその偉業が墓誌に刻まれていないこと、死亡してから埋葬までに５カ月間もの期間があること、墓誌が木櫃の下にあり文字面を下にして置かれていたことなどです。学者間でも諸説があり、いまだ解明されていません。遙か1300年前の奈良に想像をかきたてられます。

太安萬侶墓は昭和55（1980）年に国の史跡に、太安萬侶墓誌は昭和56（1981）年に重要文化財に、それぞれ指定されています。

【主要参考文献】
●国史大辞典編集委員会編『國史大辭典』吉川弘文館　1994年
●奈良県立橿原考古学研究所編『太安萬侶墓』
奈良県教育委員会　1981年
●毎日新聞社編『古事記の証明』毎日新聞社　1975年
●「太安万侶の墓誌出る」（『奈良新聞』昭和54年1月24日）
●「国指定文化財等データベース」文化庁
http://www.bunka.go.jp/bsys/index.asp（2011/12/1アクセス）

（川村　殉子）

―図書情報館で調べる―　レファレンス事例紹介　＜第４回＞

◆一般資料から◆

Q：テレビで、唱歌「蝶々」には４番まで歌詞があると放映されていた。３番・４番の歌詞を知りたい。

A：　『新編　教育唱歌集　第１集』（明治39年１月発行　訂正６版）では、「蝶々」の歌詞が４番まで紹介されています。

1. ちょーちょ。ちょーちょ、菜の葉にとまれ。
菜の葉にあいたら、櫻にとまれ。
さくらの花の　さかゆる御代に、
とまれよ。あそべ。あそべよ。とまれ。
2. おきよ。おきよ。ねぐらの雀。
朝日の光の　さしこぬさきに、
ねぐらをいでて、梢にとまり、
遊べよ。すずめ。
うたへよ。すずめ。
3. とんぼ。とんぼ。こちきて。とまれ。
垣根の秋草、いまこそ盛り。
さかりの萩に、はねうち休め、
止れや。とまれ。休めや。やすめ。
4. つばめ。つばめ。飛びこよ。つばめ。
古巣を忘れず、今年もこゝに
かへりし心、なつかし嬉し。
とびこよ。つばめ。かへれや。つばめ。

近代初等教育が始まった明治期、文部省は『小学唱歌集』（明治14～17年）を作りました。低学年用の教材として、西洋の民謡メロディーに日本のわらべ唄の歌詞をつけて作られたなかの一つが「蝶々」です。

当時、唱歌教育の指導者であった伊沢修二が愛知師範学校の校長をしていた頃に、スペイン民謡（とされている説が多いようです）のメロディーに、教員である国学者野村秋足（むらあきたり）に選ばせたわらべ唄「蝶々ばっこ」の歌詞をつけたものとされています。２番の歌詞は、文部省音楽取調掛であった稲垣千穎（いながきちかい）の創作によるものです。『新編　教育唱歌集第１集』になって登場する３番４番は、作詞者不詳となっています。あまり定着しなかったのか、歌詞は２番までとして紹介されていることが多いようです。

昭和になり終戦を迎えると、軍国主義・超国家主義的なものや神道に関係のあるものは排除されるようになりました。昭和22年５月発行『一ねんせいのおんがく』では、「ちょう　ちょう」の歌詞は１番のみとなり、「さくらの花のさかゆる御代に、」が排除され、「さくらの　はなの　はなから　はなへ」と現在まで歌い継がれています。

【参考資料】

●海後宗臣編　『唱歌（日本教科書大系 近代編 第25巻）』講談社　1965年
●上笙一郎編　『日本童謡事典』東京堂出版　2005年
●堀内敬三，井上武士編『日本唱歌集』岩波書店　1958年
●読売新聞文化部『唱歌・童謡ものがたり』岩波書店　1999年

（三宅　和恵）

Q：明治22年に十津川郷で起きた水害と新十津川村建設の関係を記す資料を知りたい。

A：　平成23年９月に襲来した台風12号によって、吉野郡十津川村、五條市大塔町は甚大な被害を受けました。これ以前にも、明治22年に同地が県史上最悪の水害を受け、住民の一部が北海道へ移住した歴史があります。

明治22年８月に吉野地方は記録的な豪雨に見舞われます。特に十津川郷６ヵ村の被害は大きく、死者168人、全壊家屋426戸、全耕地の27％を失います。県は全国からの義捐金、下賜金で救援に尽力しますが、この復旧は困難を極めます。そのため住民のうち2,600人が北海道樺戸郡徳富へ移住し、新十津川村を建設します。この資料として多く紹介されるのが、「明治22年吉野郡水災誌」です。これは同24年４月に宇智吉野郡役所が編纂したもので、各村の被害状況、移住経緯を詳しく記しています。

公文書館機能を併せ持つ当館は、明治～昭和期の奈良県庁文書を所蔵しますが、この中に「北海道一件」があります。表紙に「明治二十二年 北海道移住一件勧業課」と記す文書は、県勧業課が作成、県庁で保管し、旧奈良県立奈良図書館に移管され、現在は当館が所蔵します。内容は北海道移住に関する調査、移住手続要項、県知事が移住民に出した告諭、北海道庁長官・新十津川村村長との連絡文書などです。

宇智吉野郡長と十津川郷北海道移住惣代６人から移住費援助の願書を受け、県知事の税所篤が内務大臣・大蔵大臣へ宛てた上申書は、十津川各村と大塔村の甚大な被害状況を切実に訴えます。上申を受けた内務大臣はこれに応じ、移住費を増額します。その他、明治天皇から移住民へ2,000円の下賜金、吉野の山林王である土倉庄三郎から500円の義捐金を受領した文書を綴じます。このように「北海道一件」は、新十津川村建設に奔走した奈良県の動向が具体的に分かる資料であると回答しました。

【参考資料】

●和田萃ほか『奈良県の歴史』山川出版社　2003年
●蒲田文雄ほか『十津川水害と北海道移住』（シリーズ日本の歴史災害２）古今書院　2006年
●新十津川町史編さん委員会編『新十津川百年史』新十津川町　1991年
●『北海道移住一件』奈良県庁文書　1889年

（北堀　光信）

イベント掲示板

■入館者300万人達成!

奈良県立図書情報館は、昨年７月８日に、開館以来の入館者が300万人に達しました。300万人目の入館者は、京都市在住の大学生天野歩さんでした。天野さんは、京都市立芸術大学美術学部でインド美術を研究されています。「とてもすばらしいきれいな建物」と天野さん。「今日は久しぶりに来ました。施設も清潔で開放感があります。300万人目の入館者ということで、驚いています。光栄です。」と話しておられました。達成期間もどんどん短くなっており、日平均の入館者数も2,000人余りと着実に増えています。

千田館長より記念品を受け取る天野さん

■新たなイベント

今年度は、これまでのイベントに加え、新たなイベントを展開した年でもありました。

図書情報館が、地域の生涯学習や情報発信の拠点として、佐保川まちづくり塾を開講し、それを記念した「佐保川アートの日・音楽の日」を開催しました。館内各所と庭園に彫刻の現代アートを展示するとともに、佐保川の桜並木を背景に、玄関前や庭園の特設ステージでのコンサートを開催しました。昨年は、東日本大震災という未曾有の災害に見まわれましたが、今回のイベントはそのチャリティーイベントとして開催されました。最終日には、300名余りの方が参加して、大阪フィルハーモニー交響楽団金管アンサンブルによるメインコンサートが行われました。

「佐保川音楽の日」メインコンサート

それ以外に、６月19日・21日にフランスの音楽イベント「音楽の祭日」とタイアップしたコンサート、７月21日には、大震災チャリティーコンサートとして、昨年に引き続き「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル弦楽四重奏の夕べⅢ」を開催しました。

ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル
弦楽四重奏の夕べⅢ

９月10日には、企画展「藤村の旅路」の開催を記念した吉桑道子さんの独唱と二胡の合奏によるコンサート、さらに11月４日には、日独交流150周年記念植樹式が当館で行われたのにあわせ、大阪フィルハーモニー交響楽団団員による弦楽四重奏のコンサートが開催されました。

日独交流150周年記念コンサート

さまざまな機会に新たな出会いをつくり、新たな情報への入り口を開くこと、図書情報館こそそれにふさわしい発信拠点だと考えています。

■多彩なイベント

６年目を迎えた千田稔館長による館長公開講座「図書館劇場」も、「奈良・大和学入門」をテーマに、６回講座を開催しています。

図書館劇場Ⅵ

また、奈良県出身の落語家 桂文鹿さんプロデュースによる図書館寄席も３年目。「花鹿乃芸亭（はなしかのうんてい）」として“語られる書籍”の醍醐味の発信を続けています。

図書館寄席「花鹿乃芸亭」

また、相談事業もさらに充実。済生会奈良病院瀬川院長による「医療・健康相談会」、「法務無料相談会」に加え、今年度から「司法書士による法律相談」を開催しており、関係資料の提供もあわせて行い、専門分野と図書館をつなぎ、気軽に相談できる事業を目指しています。

医療・健康相談会

昨年３月からは、公立図書館では初めて、知的書評合戦「ビブリオバトル」を月１回開催。新たな本の楽しみ方を参加者とともに提案しています。

浴衣 de ビブリオバトル

さらに、奈良県出身の童話作家 花岡大學の作品朗読会「花岡童話を愛でるつどい」、小型パイプオルガンと古楽器のコラボによるクリスマスコンサート、岩手・花巻の方言で語る「賢治の世界」など多彩なラインナップで利用者の好奇心を触発しています。今年２月には、「シゴトヒト2daysフォーラム」を開催するなど、まだまだ多彩なプログラムが続きます。

■企画展示・図書展示

さまざまな関係機関や団体、企業とタイアップして開催される企画展。社会の動向にも素早く対応し、所蔵資料をさまざまな切り口で紹介する図書展示。今年もいろいろな仕掛けで、来館者を触発しています。特に、昨年９月には、「帰還カプセルはやぶさ特別展示」を開催し、実物の迫力を感じていただきました。

【主な企画展】

・「日独交流150周年記念プロイセンが見た幕末日本」（4/5～5/1）
・「暮らしの中の奈良ブランド展 」（5/31 ～ 6/12）
・「帰還カプセルはやぶさ特別展示」（9/21 ～ 25）

帰還カプセルはやぶさ特別展示

【主な図書展示】

- 「日本とドイツの150年」（4/1～5/8）
- 「山口定展」（4/1～5/8）
- 「古文書を読む－くずし字に親しもう－」（5/21～6/29）
- 「没後50年 柳宗悦と民芸 －「用の美」を求めて－」（5/21～6/29）
- 「学校司書が選んだオススメＹＡ図書！2011」（5/21～6/29）
- 「日本の古典音楽－雅楽の魅力－」（7/1～31）
- 「追悼 小松左京日本SFのパイオニア（1931～ 2011）」（7/30～8/14）
- 「がんと向き合う－がんを正しく知って、早期発見・早期治療－」（10/1～27）
- 「作家 北 杜夫氏を悼む」（11/1～13）

★図書情報館から全国に発信！★

奈良県立図書館創立100周年記念書籍『読み歩き奈良の本』のほか、全国から若者が集まる「自分の仕事を考える３日間」フォーラムから生まれた西村佳哲（働き方研究家）著『自分の仕事を考える３日間Ⅰ with 奈良県立図書情報館』、『みんな、どんなふうに働いて生きてゆくの？－自分の仕事を考える３日間Ⅱ with 奈良県立図書情報館－』そして、昨年12月にシリーズ最終刊『わたしのはたらき－自分の仕事を考える３日間Ⅲ with 奈良県立図書情報館』（弘文堂刊）が全国の書店で発売されました。図書情報館でのイベントから生まれたユニークな書籍であり、当館の情報発信のひとつのかたちとなったものです。

また、昨年は図書情報館グッズもデザインを一新しました。インフォメーションカウンターにて好評発売中です。

（乾　聰一郎）

■編集後記

今年は、我が国最古の公開図書館「芸亭院」が石上宅嗣によって設立されてから1250年の節目を迎えます。これを記念して５月10日（木）には奈良ロイヤルホテルを会場として公開の記念講演とパネルディスカッションを開催します。また、翌11日（金）には芸亭院ゆかりの地を巡るツアーも計画しています。今回はこの芸亭院顕彰事業に関連して、芸亭院の設立の時代背景やその後の顕彰事業の足跡、また、淡海三船と並び称され、当時の文人の筆頭に挙げられた石上宅嗣という人物の事蹟を紹介する特集を組みました。どうぞ、この機会にご理解を深めていただき、奈良時代の文人達の生活や石上宅嗣の思いに触れていただければ幸いです。

レファレンス事例紹介や「奈良のもの・ひと」、イベント掲示板などの連載記事に加え、新しい切り口でご紹介した公文書館機能の紹介記事なども含めまして、皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。

奈良県立図書情報館報　うんてい
（うんてい復刊）第４号
発行日　平成24年３月１日
発行人　千田　稔
発行所　奈良県立図書情報館
〒630-8135　奈良市大安寺西１丁目1000
TEL.0742-34-2111　FAX.0742-34-2777